

図書館だより

1998. 1. 19

第 19 卷 4 号

通巻 144 号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



新雪の朝

コ
マ
ン
ス
マ
ン

絵と文・國田祐作

戦争が終わってしばらくすると文化講演会というものがある。日本の各地で盛んだ。私たちの旧制中学校にも中学の大先輩、渡辺シンイチローが講演にやってきた。当時 NHK のラジオ人気番組「話の泉」の常連で物知り博士として有名だったひとである。

中学 5 年、最上級生の私たちは講堂にアグラを置いて話を聞いている。「君たち、卒業というのを英語でナンというの？」シンイチロー氏は生徒たちに質問した。私たちは坊主頭を下げて視線を合わせないようにしている。ようやく、英語のデキる生徒が、グラジュエーション、と答えた。「ほかに？」。こういう時しばしば困惑するのが英語の先生である。教え方を試されているようなものだからである。私は担当の英語の先生に同情した。「コメンズメント。これは始まりということです。フランス語ではコマンスマン」。このひとは戦前パリに特派員として長かった新聞記者だった。卒業とは終わることではなく新しい始まりなんだ、ということ卒業を控えた私たちにハナムケのことばとして伝えたかったのだろう。ほかにどんな話を聞いた

のか全く覚えていない。

大学の卒業式に私は出なかった。ちょうどその日が失業保険の支給日だったのだ。コマ切れのアルバイトをやめて学校警備員をやっていたのだが卒業制作に追われて仕事をやめ、この日最後の手当を受け取ることになっていた。卒業の前に失業していたのである。

誰もいない学校の事務室に行くと顔見知りの事務のおじさんが紅白まんじゅうの饅頭と卒業記念のパレットを手渡してくれた。私はそれを抱えて上野の山から不忍しのぼすの池のほうへ下りていった。池の端のいつものコーヒー屋、私たちのタマリ場には仲間のだれかがきついているはずだった。

春の残照が池にキラキラ映っている。枯蓮が黒い影を落としている。さて、これからどうやっていくか。ふいに昔のあのコトバがよみがえってきた。コマンスマン、事の始まり……。足早に歩きながらなんどもそれを繰り返している。

(くにた ゆうさく 教養部教授 芸術論)

大学人として市民として

中村敏子

図書館といえば忘れられない思い出がある。1992年、私はイギリスのオックスフォード大学にある日産日本研究センターに属して、福沢諭吉の家族論に関する博士論文を執筆中だった。2年の滞在期間があと何週間かでおわろうとする秋の日に、最後の追込みとばかり、私は大学の総合図書館であるボードリアン・ライブラリーに出掛けていった。

ボードリアン・ライブラリーは、外の道からアーケードのような入り口をくぐると中庭に出る。中庭を囲んで建物が建っており、閲覧室の入り口は中庭を横切った左側にある。いつもは中庭に人影はまばらなのだが、その日に限って正面の建物の入口付近がにぎやかで、そのざわめきの方に目をやると、オックスフォードに特有の、様々な学位によってスタイルや配色に違いのあるガウンを着た人々の姿がかいま見えた。何か大学の行事があるのだなと思いながら、私はそのまま閲覧室に入り、しばらくJ・S・ミルに関する本を読んだ。

しばらくして帰るために再び中庭に出てくると、先程のざわめきが建物の外にまで溢れてきており、アーケードのところには職員らしきおぼさんが何人か、そちらの方をみて何かを待っている。「何かあるのかしら？」元来が野次馬な私は、帰るのを少し延ばしておぼさんたちの脇に立ち、「何か」が起こるのを待っていた。

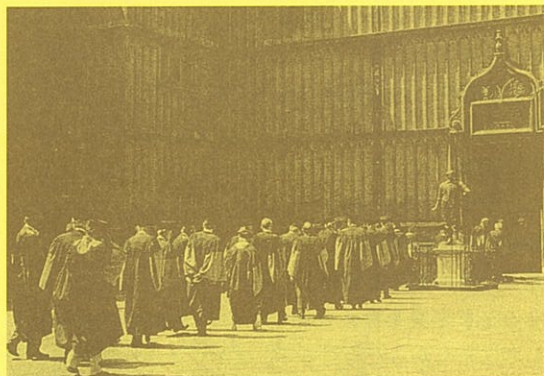
ほどなく正面の入り口から色とりどりのガウンを着た人たちが中庭を横切ってこちらに向かってくる。その中に一人スーツ姿の背の高い紳士が、本当に私のすぐ前を通り過ぎた。1メートルも離れていなかっただろう。私のはっとして彼の後を目で追うと、道に出た彼は、待ち受けた人々に手を振って応えている。その紳士は、エリザベス女王の夫君であるエジンバラ公フィリップ殿下だった。

殿下の乗った車が行ってしまい、元の静けさに戻ると、私は不思議な気持ちになった。王室のメンバーが

見えるというのに、アジアから来た一介の留学生が通路のところに立っていても何も言われなかったということが信じられない。何も言われなかったところが警備員のような人さえいなかったのだ。そして、このようにあくまでも通常の研究を保証しながら王族を歓迎した大学の態度に、大学の図書館は研究のためにある。それは誰にも、それがたとえ王室のメンバーだったとしても、妨げられるべきではないという大学人の強い意志を感じたのだ。

この出来事は、イギリスにおける大学の独立と気概をつよく印象付けたが、私には大学人のあり方に関して、もうひとつ忘れられない思い出がある。

それは私が初めてイギリスに滞在した1978年のことであった。ある寒い土曜日に私は自転車で買物にいき、帰りがけに、ちょっと洒落たお店の並んでいる通りに立ちよった。その通りの片方はアーケードになっており、ときどき出店のようなのが出ていることがある。その日もずらっと出店が並んでいたが、それはあるチャリティー団体のバザーだった。買うとはなしにぶらぶら冷やかしているうちに、ちょっと気に入ったものがあつたので、買い求めるために売り子に声をかけようとして、私は一瞬躊躇した。なぜならば、売り子として座っていたのは、夫の属していたカレッジ



名誉学位のガウンを着た人々

の大先生だったからである。

オックスフォード大学は、多くのカレッジによって成り立つ総合体である。学生も教師も、いずれかのカレッジに属しながら、授業はカレッジを横断して行われる。それゆえ多くの教員がいるわけなのだが、そのなかでも、「プロフェッサー」という称号を持つ人は数えるほどしかない。その先生は、そうした数少ない「プロフェッサー」のひとりだったのである。

彼は南アメリカの専門家で、学生がゼミでつまらない報告をすると、途中で報告をやめさせてしまう厳しい先生として知られていた。さらに、彼自身何年前に交通事故に遭い、体の具合があまり良くないとも聞いており、実際歩くときにはいつも杖を使っていた。そのような人が、休みの日の午後、しんしんと寒さが上ってくるような戸外で、チャリティーバザーの売り子をしているなんて。声をかけようとして驚いている私と目が合うと、その先生は、彼独特のはにかんだような微笑みをうかべた。私はやはりその偉い先生を売り子として扱うことに気後れがして、そのまま言葉を交わさずに帰ってきたのだった。

残念ながらその先生は、私たちの二度目のイギリス滞在までに亡くなってしまったのだが、私はいまだ

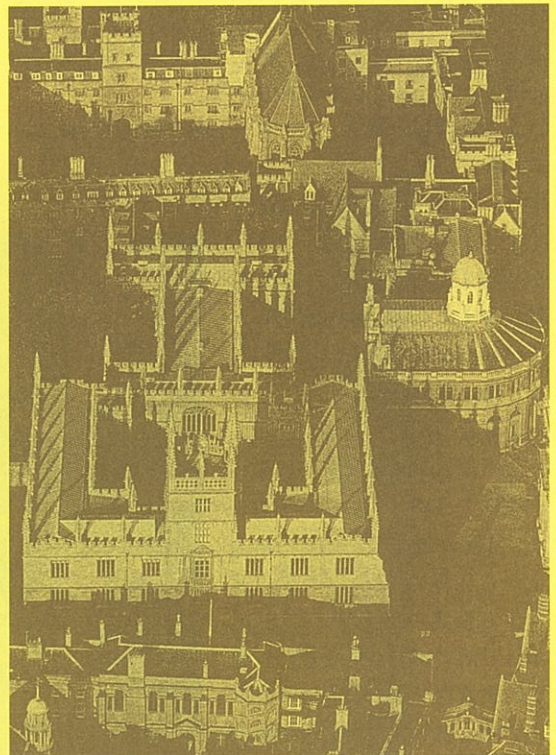
も、彼が寒さのなか、バザーの出店の前でちょっと斜めに座り、本を読みながら売り子をしている姿、そして私を見て微笑んだ顔を思い出す。そしてそれは、学問を極めた人が、ひとりの「市民」として生きる模範として蘇るのだ。

人は、外国にいくことで自分の国を見なおすことが多いだろう。私も何年かイギリスにいる間は、突然ナショナリストに変身することが多かった。しかし、身分や職業をこえてひとりの「市民」として生きること——それは権力に迎合せず、どのような人とも連帯できることを意味するが、それについては、いまだにイギリスでの経験を思い出す必要があるように感じる人が多いのである。

(なかむら としこ 教養部教授 政治学)



カレッジの1つ、エクセターカレッジ卒業式にて



ボードリアンライブラリーの全景

イエテボリのティータイム

佐藤哲身

イエテボリ。ちょっと不思議な響きの名前ですが、ストックホルムに次ぐスウェーデン第二の都市です。小生、1995年の秋から1年間、イエテボリ大学の環境医学科にお世話になりました。本稿では大学や日常生活の一端を、気軽に紹介してみたいと思います。

「コーヒー!」、「ティー!」、廊下のあちこちで明るい声が飛び交います。10時と3時はティータイム。毎日同じ時刻にティールームに集まり、びっくりするほど濃くて真っ黒いコーヒーを飲みながら、30分ほど楽しい時間を過ごします。スウェーデンの1人あたりのコーヒー消費量は世界一だそうで、これなしに仕事はできそうにありません。火曜日の朝は学科のミーティングを兼ねていて、ケーキもふるまわれます。職場での生活のリズムなのでしょう、余程の事が無い限り、ほとんどのメンバーが集まります。ティータイムが終わるとピタッと話をやめ、カップとケーキ皿をめいめい洗い、スーッと仕事に戻ります。

3カ月ほどが過ぎ、ようやく生活に慣れてきたころに、暗くて寒い冬がやって来ました。12月ともなりますと、10時を回らなければ明るくなりませんし、3時にはすっかり暗くなってしまいます。出勤、帰宅とも真っ暗な道を歩かなければなりません。北欧の長くて暗い冬は、確かに心身にこたえるものがあります。しかし、いよいよ気が減入りそうになった頃にクリスマスがやってきます。小生が過ごした住まいは大学から徒歩で15分ほどに位置する6階建の集合住宅で、100年ほど前に建てられたいわば歴史的建造物です。広い通りを挟んで同じ高さの古い集合住宅群がわずかに弧を描きながら延々と

立ち並び、レンガやタイルで仕上げられた町並みは美しく大変魅力的です。1階のカフェやレストラン、ブティックなどが彩りを添え、家々のキャンドルライトが通りを照らします。12月の第1日曜日はキリストの降臨を意味する最初のアドヴェント、4本並べて立てられたキャンドルの1本目に火が灯ります。イエテボリのクリスマスはこの日から始まると言っても良いでしょう。2週目に2本、3週目に3本、4週目によりやく4本のキャンドルに火が灯り、クライマックスのクリスマスを迎えます。このようにして長くて暗い夜は暖かく神聖な夜へと変貌を遂げます。

さらに半年が経過し、イエテボリの人達が待ちに待った夏がやってきました。長い長いトンネルを抜けた時のような開放感があります。夜の11時を回っても、昼間のような明るさです。老いも若きも、男性も女性も、好きな格好で公園に寝そべて日向ぼっこに興じます。まさに日光をむさぼるといった表現がぴったりです。個々人の権利を重んずる国だけあって勤務時間も個人別に細かく決められており、それより決し



ティータイムの一コマ

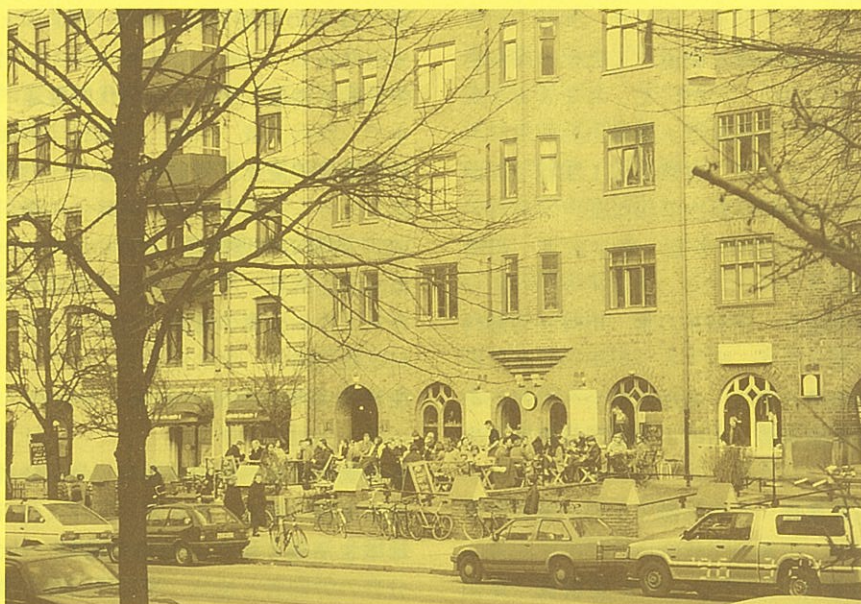
て長くもなく、短くもなく仕事を切り上げます。夏休みも5週間から7週間きっちりとります。この時期になると、ティータイムもバカンスの話でもちきりです。「ハズバンドとクルージングに出かけるわ」、「ホルボでスカンジナビア一周だ」、「カナリア諸島で寝て暮らすのよ」。もちろん遠出する人ばかりではありません。都会の生活を離れ、海辺の小さなサマーハウスで静かに一夏を過ごす人達もたくさんいます。サマーハウスよりボートが好きな人は、近海のミニクルージングを楽しみます。アパートの駐車場やスーパーマーケットがみごとにガラガラになってしまいます。毎日の食生活や着ているものはお世辞にも贅沢とは言えず、むしろ大変質素な印象を受けます。基本的に生活の楽しみ方や価値感が違うのでしょう。日本の庶民にとって夢のようなサマーハウスやクルーザーは、イエテボリの人達にとって、一つの必需品のようです。

美しく魅力的な風景の中で生活を始めると、通勤も散歩も楽しくなります。ヨーロッパを旅して帰ってくるたびに、我が国の街並みの貧しさに愕然とさせられますが、これは小生に限った事ではないでしょう。国際会議で初めて日本を訪れた若手のホープK女史は、帰ってくるなり興奮気味に「日本は素晴らしい、美しい」を連発します。ティータイムには「サクラサクラ」を口ずさんだりしています。「気を使ってるな、しかし居候に気を使って何になるのかな？」などと勘ぐっているうちに、「障子の紙はどうしたら手にはいる

の?」、「自宅に小さな日本庭園を作ろうと思っているの」などなど、まんざら嘘でもないようです。彼女曰く、確かに美しい町並みは目にしなかったけれど、和室や小さな日本庭園にはとても感動したのだそうです。調査用の地図を手に入れようとイエテボリ市役所の文書局を訪れて驚きました。市内の地形や建物が全てコンピュータに入力されており、例えばある地区の建物群の屋根の形状を一瞬にして再現することができます。歴史ある建物と共存し、且つ美しい街並みを保ち続ける努力を垣間見たような気がしました。そして、街並みはおろか、K女史の感動した美しい和室や小さな中庭さえ現実の物にし得ない我が国の文化的貧しさを実感せざるを得ませんでした。

小生にとって最後の日がやって来ました。送別会は、ティータイムやランチタイムを利用して、簡素に行われます。この日は、「グッドバイ・ランチ」が用意されました。小生の挨拶の後、スウェーデン料理を囲みながらプロフェッサーの心温まるスピーチを拝聴。プレゼントをいただいて、デザートにチョコレートにコーヒー。1時間ほどで「グッドバイ・ランチ」は幕を閉じました。いつものようにめいめい食器を片付け、スーッと午後の仕事に向かいます。その瞬間、「ああ、これでイエテボリのティータイムともお別れだな」と言う思いが頭をよぎりました。

(さとう てつみ 工学部教授 建築環境工学)



アパートの1階のカフェは、太陽を求める人達でいっぱいでした。

新 着 図 書

- 職業病とたたかう力 北海道労災職業病対策連絡協議会編 労働経済社
- 労働と健康の科学 労働と健康の科学研究会編 労働経済社
- 福祉国家のゆくえ 福祉多元主義の諸問題 ノーマン・ジョンソン著 青木郁夫、山本隆共訳 京都 法律文化社
- 各国の社会保障 足立正樹編著 新装版 京都 法律文化社
- 社会福祉の展望 日本における自立と共同の形成 池田敬正著 京都 法律文化社
- 福祉国家と市民社会 イギリスの高齢者福祉 武川正吾著 京都 法律文化社
- 計量経済学 山本拓著 新世社
- 日本農書全集 第70巻 (学者の農書 2) 佐藤常雄 [ほか] 編集 農山漁村文化協会
- 戦争と資本主義 ヴェルナー・ゾンバルト著 金森誠也訳 論創社
- アラン経済随筆 アラン著 橋田和道訳 論創社
- 高齢社会を生きる高齢社会に学ぶ 福祉と生涯学習の統合をめざして ルイス・ローウィ、ダーレン・オコーナー著 香川正弘訳 京都 ミネルヴァ書房
- 社会保障論 古賀昭典編著 第2版 京都 ミネルヴァ書房
- 日本社会史における伝統と創造 工業化の内在的諸要因 1750-1920年 トマス・C. スミス著 大島真理夫訳 京都 ミネルヴァ書房
- 快適環境のフォークロア 自然と人工環境 三浦豊彦著 川崎 労働科学研究所出版部
- 組頭制度の研究 国際的考察 藤本武著 川崎 労働科学研究所
- 企業社会と労働組合 高橋祐吉著 川崎 労働科学研究所出版部
- 技術革新と労働の人間化 高齢化社会への対応をめざして 鷲谷徹也著 川崎 労働科学研究所出版部
- 農業「近代化」と農民 その労働と生活の変貌 井上和衛著 川崎 労働科学研究所
- リュトヘルスとインタナショナル史研究 片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング 山内昭人著 京都 ミネルヴァ書房
- フェミニズムと労働の間 コンパラブル・ワース運動の意義 リンダ・ブルム著 森ます美他共訳 御茶の水書房
- 歴史としての国民経済 滝沢秀樹著 御茶の水書房
- 福祉国家の歴史と展望 足立正樹編 増補版 京都 法律文化社
- 21世紀型企業の環境保全戦略 企業・行政・消費者のパートナーシップ 日本科学者会議公害環境問題研究委員会編 水曜社
- 現代「合理化」と労働医学 細川汀著 労働経済社
- 船員の戦後史事典 西部徹一著 川崎 労働科学研究所出版部
- 労働観のクロニクル 働くことは生活だった 三浦豊彦著 労働科学研究所出版部
- 労働者のライフサイクルと企業社会 高橋祐吉著 川崎 労働科学研究所出版部
- 労働時間 川崎 労働科学研究所
- 今日の労働時間問題 藤本武著 川崎 労働科学研究所出版部
- 企業社会と労働者 高橋祐吉著 川崎 労働科学研究所出版部
- 現代日本の労使関係 効率性のバランスシート 栗田健編著 川崎 労働科学研究所出版部
- 労使紛争処理システムの現代的課題 構造変化の中で 野沢浩著 川崎 労働科学研究所出版部
- 就業構造の変化と労働者の生活 労働科学の諸問題として 遠藤幸男著 川崎 労働科学研究所
- VDT作業の物理環境 VDTから何が出ているか 富永洋志夫著 川崎 労働科学研究所出版部
- カドミウム公害の追求 吉岡金市著 川崎 労働科学研究所
- 環境有害物の測定と評価 多田治、中明賢二著 川崎 労働科学研究所
- 新労働科学論 細川汀編著 労働経済社
- 社会保障の焦点 長宏著 法律文化社
- 地域生活圏と現代労働組合運動 社会的、公的分野の労働者と地域 平和経済計画会議編 労働経済社

- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>26 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>41 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
 冷泉家時雨亭叢書 12 冷泉家時雨亭文庫編 朝日新聞社 12 隠岐本新古今和歌集
 ユネスコ世界遺産 2 講談社 2 中央・南アメリカ
 ユネスコ世界遺産 12 講談社 12 中央・南アフリカ
 (叢書)禪と日本文化 4 ベリかん社 4 禪と文学 倉沢行洋編集・解説
 西郷竹彦文芸・教育全集 28 西郷竹彦著 恒文社
 西郷竹彦文芸・教育全集 29 西郷竹彦著 恒文社
 新資料に基づくキリシタン美術の研究 久我五千男著 大阪 久我五千男
 都市デザインの系譜 相田武文共著 土屋和男共著 鹿島出版会
 都市 誰のためにあるか 日本経済新聞社編 日本経済新聞社
 パリ 20 区物語 吉村葉子文 宇田川悟写真 東京書籍
 フィレンツェ四季暦 春夏 鈴木奈月文・絵 東京書籍
 自然災害を知る・防ぐ 大矢雅彦 [ほか] 著 第2版 古今書籍
 EXCEL 95 super master 図解・実例中心 パワーユーザー編 エクスメディア著 トップン
 EXCEL 95 super master 図解・実例中心 エントリーユーザー編 エクスメディア著 トップン
 エーロ・サーリネン 穂積信夫著 鹿島出版会
 オリンピックヒーローたちの眠れない夜 佐瀬稔著 世界文化社
 科学技術 today 日本経済新聞社編 日本経済新聞社
 英和コンピュータ用語大辞典 コンピュータ用語辞典編集委員会編 第2版
 神々の指紋 上、下 グラハム・ハンコック著 大地舜訳 翔泳社
 神の刻印 上、下 グラハム・ハンコック著 田中真知訳 凱風社
 脳内革命 ビデオ版 春山茂雄監修・出演 日本放送協会 [NHK] ソフトウェア制作 (同編者)
 科学技術文献速報 環境公害編 CD-ROM (JOIS 分野別 CD-ROM) 1996 日本科学技術センター編 (同編者)
 GA(Global Architecture) 76 二川幸夫企画・撮影 A.D.A.EDIRA
 ニューイングランド物語 アメリカ、その心の風景 加藤恭子著 日本放送出版協会
 漬物と日本人 小川敏男著 日本放送出版協会
 ローマ人の物語 5 塩野七生著 新潮社
 中島悟のドライブ・テクニク 日本放送協会 [NHK] 名古屋ブレーンズ企画・制作 NHK ソフトウェア
 岩波書店と文藝春秋 『世界』・『文藝春秋』に見る戦後思潮 毎日新聞社編 毎日新聞社
 ビル・ゲイツに会った日 吉田司著 講談社
 ビル・ゲイツのインターネット戦略 脇英世著 講談社
 台湾という名のヤヌス 静かなる革命への道 戴国輝著 三省堂
 愛情の錯覚 姜豊著 本間史訳 おうふう
 猫の事 曾明了著 村上牧子訳 おうふう
 雨季 黒孩著 井上聡訳 おうふう
 現代台湾経済分析 開発経済学からのアプローチ 朝元照雄著 勁草書房
 情報化の中の〈私〉 守弘仁志 [ほか] 著 福村出版
 石油の開拓者たち 近代石油産業生成史 村上勝敏著 論創社
 現代世界の地域システム 安藤万寿男、伊藤喜栄編 大明堂
 わがオペラの幕は上がる 集団就職から作曲家になるまで 仙道作三著 春秋社
 俳優 ジャン・デュヴィニョー [著] 渡辺淳訳 法政大学出版局
 幻想の起源 ジャン・ラプランシュ、J.B. ポンタリス著 福本修訳 法政大学出版局

新 着 図 書

- 「エスニック」とは何か エスニシティ基本論文選
青柳まちこ編・監訳 新泉社
- ヨーロッパ文化の原型 政治思想の視点より 鷺
見誠一著 南窓社
- 「イスラム原理主義」とは何か 山内昌之編 岩波
書店
- 国際援助の限界 ローマクラブ・レポート ベル
トラン・シュナイダー著 田草川弘、日比野正明
訳 朝日新聞社
- 語られざるかぐやひめ 昔話と竹取物語 高橋宣
勝著 大修館書店
- 民族はなぜ殺し合うのか 新ナショナリズム6つ
の旅 マイケル・イグナティエフ著 幸田敦子訳
河出書房新社
- アジア危機の構図 エネルギー・安全保障問題の
死角 ケント・E. カルダー著 日本経済新聞社
国際部訳 日本経済新聞社
- はたらきざかりの働き過ぎ 田尻俊一郎著 労働
経済社
- 労災・職業病闘争の課題 闘いの前進 細川汀
労働経済社
- 現代日本資本主義の政治経済機構 池上惇[ほか]
編著 労働経済社
- 日本の経済危機 1970年代[大不況]の性格と展
望 坂井昭夫編 労働経済社
- 労働と健康の戦後史 三浦豊彦著 川崎 労働科
学研究所
- マルクス・エンゲルス全集 CD-ROM版 全8枚
K. マルクス、F. エンゲルス著 ドイツ社会主
義統一中央委員会附属マルクス＝レーニン主義研
究所編 大内兵衛 細川嘉六監訳 大月書店
- 労働と紛争 野沢浩著 川崎 労働科学研究所
- 図解・測量技術 中川徳郎著 全訂新版 現代理
工学出版
- 知的人工生命の学習進化 佐野千遙著 森北出版

訂 正

第19巻3号、P9左段下から14行目
(誤)1915年 → (正)1945年

ジョン・

バチェラー師のメモワールには記録されていないと思うが、北海道を第二の故郷として愛してやまなかった英人の一人に、小樽商大の教師ストーリー氏がいる。Richard Storry (1913-1982)はオックスフォード大学で歴史を専攻したが、のち、English Literatureに興味を持ち、4年目(イギリスの大学は普通3年コースである。)まで居残る。そこで会った詩人Edmund Blundenに、“Yes, go. You will find many mean streets but even there good manners. Don't worry about politics. Let the boys of the village be your “guide”.”と激励されて小樽に来た歴史家だ。1937年のことである。出版物に：

1957 The Double Patriots: A Study of Japanese Nationalism (reprinted 1973) *chatto & windus*

1960 A History of Modern Japan *Penguin*

1979 Japan and the Decline of the West in Asia *Macmillan*

等がある。

彼がはじめて師に会ったのは1938年春札幌である。師の業績に敬意を払い、84歳の底から湧き出る活気を讃えている。

クリスマスを囲んで北国の異邦人達は合い寄ったのであろう。翌年の生誕パーティーでの逸話をStorryは伝えている。宴の後Lane家(当時北大教師米人)を3人(他に伊文化人類学者Fosco Maraini氏)は辞すが、玄関先に腰かけてゴム長を履いたはよかったものの右左反対に足をつつこんでしまった老師だった。他の二人が力一杯引っぱりがなかなか抜けない。えいっと気合いをかけたところ師はあおむけにひっくり返ってしまった。大笑している師を起こそうとするが、重くてできない。そのうち白髪、黒マントを整えつつ自分で立ちあがりまだ笑いながら靴を履いたというのである。青年のようなその反応にストーリー氏

バチェラー博士の郷里を訪ねて (5)

Cornish 篁子

は驚いているわけだ。

さて話しをアックフィールドに戻す。

Lesley Batchelor 夫妻は私達（他にバチェラー研究のソアス学生イモジェン・リーヴス）を快く受け入れ、古い記録も一括見せてくださった。師が亡くなって以来受け継がれた、その木箱に収まった遺品は殆ど書紙類である。稀有なものもある。これらは既に幾人かの学者の目に触れ、記録されてある筈であるが、他にバチェラー師をモデルとした40cm程の彫刻もあって、これはfamily treasureとなつて応接間の棚に飾つてあつた。そのブロンズの立像の足元には1937年加藤作と刻まれている。

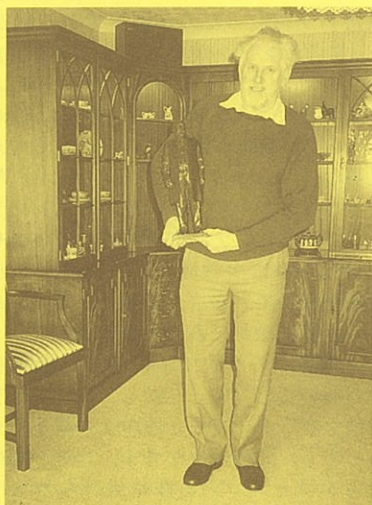
静かながら身内から偉人をだした誇りを隠し切れないという感じで熱っぽく家族を語り縁戚の墓碑の数々も説明していった同氏であつたが、夫婦して最後に強く望んで言われたのは、この貴重な遺品は北海道のしかるべき所で保管研究されるべきで、そこへ寄贈したい、又大々伯父が人生の大半を過ごした北海道に自らも行って寄贈を執り行いたいということであつた。

北海道の機関でこれを実現させて下さるところはあるまいか。これはBatchelor夫妻の切な希望であると共に私達の願いでもある。

書けば尽きないUckfield訪問記であるが、これで一応拙稿を終わらせていただく。

Setsuko Cornish

(セツコ コーニッシ ロンドン大学)



バチェラー一家内でジョン・バチェラー像をかかえて立つレズリー・バチェラー氏



教会墓地内でレズリー・バチェラー夫妻とソアス学生イモジェン・リーヴス

「ムーミン谷へようこそ」

富原真弓 著

KKベストセラーズ

子供の頃、日曜の朝のテレビアニメを楽しみにしていた人は、多いと思います。私は数あるアニメの中で、ムーミンが大好きでした。ずーっと「カバ」だと思っていたぐらいムーミンについて何の知識もなかったのですが、ムーミンの体型に親しみを持ってしまったからなのか、毎週見ていました。でも一度も原作を読んだこともなく、作者についても北欧の女性としか知らなかった私ですが、この本「ムーミン谷へようこそ」に出会ってずーっと感じていた何か寂しい感じや不思議な気持ちは何だったのか理解できる気がしました。また、作者ヤンソンがフィンランドで生まれ育ったフィンランド人でありながらスウェーデン語ですべての作品が書かれているというものはじめて知りました。ヤンソン自信が語っているようですが、ムーミンの世界はスウェーデン系フィンランド人の家族の物語だそうです。「スウェーデン系フィンランド人の特徴」についてヤンソン自身明言していませんが、ムーミン世界の中に少数派グループにみとれる一種の孤立感が現れているような気がします。あなたもムーミンの世界に触れてみたくなりましたか？

ムーミン世界がのどかで愛に満ちた空間であるのはまちがいないことです。しかし、ユートピアにも悩みや困難は存在するのです。仲のよい親子や夫婦や友だちであっても、問題は生じます。身近な間柄だからこそ生じるエゴとエゴの葛藤や気持ちのすれちがいもあります。そんな日常の悩みを抱えた大人こそムーミンを読むべきなんだなーと、この本を読んで強く感じてしまいました。しばらくの間、私のムーミンまみれの日々は続きます。

(T.M)



「読めない」ときに「読める」本 —大田垣晴子さんの「画文」—

短大を卒業し、図書館職員としての一步を踏み出そうとした私に、恩師の一人はこう言いました。

「あなたは本が好きだから、迷わずこの仕事を選んだのでしょうか、あまりに本に近すぎる環境に身を置くと、逆にあなたは本から遠ざかってしまうのではないかしら。」

そんなこと起こるはずがない、と思いました。物心がついたときからずっと、本と一緒に過ごしてきた私が、本を読まなくなるなんて、と。

それから数年経った今、悔しいことに恩師の予想は当たってしまいました。正確に言うと、「読まなく」なったのではなく「読めなく」なったのですが……。

毎日本に埋もれて仕事をしていることの反動からか、私は年に数回、突然「本なんて見るのもいや、読む気にもならない」という、「読めない」スランプに陥るようになってしまいました。初め、この状況にはかなりショックを受けたのですが、今では、「文字より絵の多い本」を選んで読んでみるなど、楽しみながらスランプを乗り越えることにしています。そんなときに出会った本の中で、私の一番のお気に入り、大田垣晴子さんの本です。

「イラスト 日用服飾事典」という本は、タイトルからわかるとおり、服飾に関する単語をアルファベット順に、シンプルで可愛い画と文で解説したものです。見ているだけで楽しくて、服飾のちょっとした知識も身につく、一石二鳥な本です。週刊誌に連載していたので、知っている人も多いのではないのでしょうか。

「サンサル」(①・②)という本は、月刊誌の連載を単行本にまとめたものですが、連載自体が「一人編集雑誌」スタイルになっているという、面白い本です。内容は、彼女が見聞きし思ったことを記事にしたものですが、身近な話題が多く、心休まります。タイトルの「サンサル」(=「見ざる言わざる聞かざる」)とは、誰もが持っているもどかしさを意味し、彼女はそれを「書く」ことで表現したい、という思っているのだそうです。

大田垣晴子さんの本は、全て彼女の画と手書きの文で出来ていて、彼女はそれを「画文」と名づけています。聞き慣れない言葉ですが、画と文が一体となった彼女の本を説明するには、この言葉しかないように思います。

ぜひ一度、手にとってみてほしい本です。読んだ人にはきっと、彼女の「画文」の良さがわかってもらえらると思います。

(C.N)

参考文献：「イラスト 日用服飾事典」講談社+α文庫
「サンサル①」「サンサル②」廣済堂出版

異文化への旅

史 争

(中国 瀋陽市出身)

中国の古い諺に「井底之蛙」(「井の中の蛙」)という言葉があります。「井の中の蛙、大海を知らず」ともいいます。それは自分の僅かな見聞や知識にとらわれて、ほかに広い世界のあることを知らずに得々としているたとえです。わたしはこのような蛙になりたくありません。新たな飛躍を求め、広大な世界を眺望してみたいと思っていました。そして、様々な好奇心と旺盛な探究心に胸を膨らませて、自分なりの生き方を求めるため、日本へ飛び出しました。そして、たくさんのことを感じました。

まず、日本に来たといっても、勉強せずに日本語が分かるわけではありません。言葉の勉強をするにつれて、しばしば私は新鮮な驚きと強い感動を覚えました。例えば、よく使われている「バカ」という言葉があります。その語源はおそらく中国の熟語「指鹿為馬」(鹿を指して馬を為すという意味)からきたものと考えられます。「史記」に次のような話が記載されています。秦の時代に始皇帝の死後、幼い息子秦二世が皇帝に即位しましたが、丞相趙高がまもなく政権を奪ってしまいました。やがて趙高が皇位を狙うようになりました。そして、自分の権力を試してみようと、秦二世に鹿を献上し、それを馬と言って押し通しました。そのとき趙高を恐れて堂々と反対する大臣はいなかったということです。つまり、「指鹿為馬」というのは、間違っているのが明らかなことなのに、押し通して人を愚弄するという意味なのです。このように日本語を学ぶにつれ、中国語と日本語のつながりに興味を覚え、日本語に対し非常に親近感を覚えてきました。

次に感じたのはマンガについてのカルチャーショックです。ある日、もの凄く知名度の高い二人組のタレントの番組が放送されました。その二人がマンガについてクイズで質問を受けました。その詳しさに、私は驚きました。日本では成人になってもマンガを読み続けるのは珍しいことではないでしょう。しかし、私はどうしてもマンガは子供が読むものだとしか

考えていませんでした。私の場合は、マンガを読むのは小学生までで、小学校に入らんがために、一心に読んだものでした。強い印象に残っているのは、難しい漢字が沢山あって知恵を絞って画面を理解しようとしたことです。それにもかかわらず日本では大人までがマンガを読み、常に分厚いマンガが山と積まれて捨てられるのを目にします。そんなときにも、私はなんとも言えない感じが心に広がりました。

もう一つ、二カ月前、いじめについてのテレビ番組が放送されていました。記者がいじめっ子にインタビューして、いじめる理由を聞いた時、思いがけなくいじめっ子が「彼奴は英語がうまいから、先生の質問に何でも答えられる。だからいじめてやるんだ。」と何げない顔で言いました。それから先週の授業の「海外帰国子女」についての文章では、海外帰国子女がいじめられているということに関して、その原因は彼らが自己主張できることとか、強い個性をもっていることとか、日本に特有な「よそ」者を受け付けない心情とかであると述べていました。日本人はよく外国人に、ものをはっきり言わないと指摘されます。談話を成立させるのは日本人にはたいへん困難なことだというわけではありませんが、黙ってこくんとうなずいたり、反対意見を言わずに相槌を打ったりする傾向があります。目立ちたがらない人間性であればこそ、同様な学生や海外帰国子女への警告の信号弾を発射してしまう。それは親譲りの個性でなく、内気な民族性なのでしょうか。

両国は文化上の共通点が多いけれども、日本語の特有の言い回しや独特な表現等、自国の文化との違いも多く、私はそれに魅了されています。日本での学習を通じ獲得した、あらゆる知識や得難い体験が私の将来に役立つのなら、本当に幸運で幸せに思います。そして、これからも新たな喜び、気持ちの張りをもって夢に向かって自らの道を切り開いていきたいと思います。

(シ・ソウ 人文学部日本文学学科一年)

傳(でん)と傳(ふ)のことなど

～その四～

石村 義典

正史から抹消された「韓国皇太子李垠行啓」は、明治天皇の伝記、明治宮廷の克明な記録である『明治天皇記』には記録されており、読むことができる。これは金子堅太郎、三上参次の筆がはいったとはいえ、明治のキリスト教をうけいれた三又竹越与三郎の手によるからであるとうけとる。この三又竹越与三郎の『二千五百年史』に「北駕文庫」のなかでであることができる。この『二千五百年史』のなかで生きた人間に出会い、『プルタルコス英雄伝』を読んでいくような想いをもつのは、私一人であろうか。南方系人種の政権としての王朝、北方系人種としての武家との対立、抗争による国民国家の形成を描き、国民の生活史を描いている。「南人の王室的貴族主義」「北人の武断的民政主義」「革命」「国体の変革」「天皇御謀反」「將軍謀反」こんな言葉に出会い、北朝、南朝の葛藤も民衆と同じ水準における人間史の一駒として描いている。この書は日清戦争直後明治二十九年の刊行であるが、日本の外に向かつての膨張とは無縁な書である。「昔カブウルは以太利建国の業を終わりにて後慨然として曰、以太利は已に起てり、之より以太利人民を建てざるべからずと。余は是此語の殊に日本帝国の現状に適切なるを覚ゆ」とは同じく、この竹越与三郎『人民読本』(大正二年刊)の序の言葉である。憲法を愛護すべき万里の長城を国民の胸中に築くことを願っての『人民読本』である。(初版は明治三十四年)

私はこの三又竹越又三郎が明治二十五年(1892)年八月二十八日に『国民新聞』によせた「北海所感」の言葉を幾たびも幾たびも読み返し、心に刻もうとしたことがあった。「北海道の地を踏みて心

頭に上る快感は其の町村邑、社交、田園、人民の気風、粗大、寛裕にして、全く内地醜態として万事偏狭なるに異なるにあり」とし、人民は共同の精神を具えもち、社会の圧政から無縁で、自ら自由を感じ、そしてまた他者に対して寛容であるとしている。つづいて「万民同等のユトピア的社会を理想する者は、去て北海道に行きて、其理想を實行すべき也。社会が其初に於て如何なる姿態なりしかを知らんと欲するものは、北海道に行くべき也」とのべている。明治二十五年、手つかずの、豊かな自然をもつ北海道を私はなつかしむ。

A. トインビーは『歴史の研究』の「歴史家の靈感」のなかで「20世紀の日本の歴史家」として、この三又竹越与三郎にふれている。

私の畏敬する知人の御尊父の臨終に成瀬仁藏、大竹寛一とともに立ち会ったのが、この竹越与三郎であったことを幾度か聞いたと思う。その知人もすでに人生の別離を私はずもっている。

(いしむら よしのり 北駕文庫担当)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.19 No.4 (通巻144号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所: ㈱アイワード